

われわれが信を得る機縁となるのは善知識に会うことである。故に善知識は還相の菩薩として体験される。逆悪をおかした阿闍世も調達も、家庭の大悲劇に悲泣雨涙した韋提希も、これら実業の凡夫が、信体験の上から、親鸞聖人には「逆悪もらさぬ誓願に、方便引入」した還相の菩薩と拝まれたのである。われわれが深難信の法に遇うことを得たのは、われをとりまく人々の縁によるのである。これらの人々は皆還相の菩薩として拝せられるのである。この体験の表現が、人々に対する心からの合掌となるのである。

真宗教相の原意について

——真宗の教相と根本仏教の教義について——

西尾 京雄

一 親鸞聖人の教学が仏教思想の正統であると考えるものとして、根本仏教におけるどの教説に根拠をおくものであるかを究めなくてはならない。とくに、浄土教の經典などは、印度本土のものではないという考え方を横行している時でもあるのであるから。

二

それについて、解深密経が般若経と華嚴経とによって構成せられているが如く、大無量寿経は涅槃経と華嚴経との成立の上にあるといわれている。思うに、涅槃経は仏陀の大涅槃の境地を常・

楽・我・浄と説くのであるが、それは、根本仏教の教説において、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の人々がともどもに覚証することを説く四念住説である身・受・心・法について、無常・苦・無我・不浄と体験するところに顕現される相でもある。華嚴経は仏陀の一念の覚証の境地を説く。大無量寿経は十方の衆生であるわれ等が身証せられる念仏体験の相を説いている。而して、その体験の相は成就文に示されているので、それは、身・受・心・法の四念住の四相として領受することができる。

即ち、

一、聞……………身念住

二、其名号……………受念住

三、信心歡喜……………心念住

四、即得往生……………法念住

住不退転

それで、親鸞聖人の教行信証の四法の教相は念仏の身・受・心・法に領受せられた相であると思うのである。

三

四念住から念仏の移行についていう前に、仏教の根本思想として四法印をいう。それは、無常印、皆苦印、無我印、寂滅印であるが、それは、四念住説を要約すると思われる。

諸行無常

Aniccā vata saṃkhāra

是生滅法

uppiḍa-vaya-dhammino,

生滅々已

uppajjivā nirujjhanti,

寂滅為楽

tesaṃ vūpasamo sukho' ti.

この偈に依るのであろう。而して、それは次第の如く、身・受・心・法について、ゴータマ仏陀がこの土において、我々を発遣したもう仏語である。

四

人おのおのの境遇によって異なるが、阿難の如く仏陀に近侍して廿五年、多聞第一でありながら仏陀入滅したもうも証することができなかったが、結集に際して証しもの、キサ・ゴタミーの如く愛児の急死によって仏門に入りしものは、身無常において、仏陀の大悲に接し念仏したのでないか。

周梨般特は一本の箒を与えられて、煩惱無尽に思い立ち、仏陀の善巧方便に感泣したのでないか。われわれ如き凡人は、日常生活の上に、貪愛、瞋憎のはてなきを知らしていただいて、はじめて大悲心の知恵の光にめぐまれて念仏せられる。それは久遠劫来の呼声であった。

五

高僧和讃に、

善導大師証をこい 定散二心をひるがえし

貪瞋二河の譬喩をとぎ 弘願の信心守護せしむ。

この譬喩は、前述の法説と合一する。これは偶然ではなく、仏々相念の世界であるからであるまいか。「同朋」九月号所載、曾我量深先生の「すでにこの道あり」参照せられたい。

一枚起請文、歎異鈔、並びに自然

法爾章に於ける念仏の扱いについて

佐々木蓮磨

浄土教は、その伝統から見て、念仏往生をぬぎにしては意味をなさぬと思う。しかし、浄土教が浄土真宗に発展したところに、念仏と往生についての扱いが変遷しているので、その点を一枚起請文、歎異鈔、並びに自然法爾章の表現によって窺ってみたいと思う。

浄土教の念仏を最も簡明に示されたものが法然の一枚起請文であろう。一枚起請文では「ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申て、疑なく往生するぞと思いとて申す外には別の仔細候わず」とある。この表現において注意すべき点は、「往生極楽のためには」とあって、念仏行というものは往生極楽の手段という形になっている。ところが歎異鈔になると、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらず」とあるから、念仏と救いとが離れず、念仏するところに救われるという意味がハッキリと現わされている。従って往生極楽ということは、念仏して助けられるという現在の事実の中に納められている表現である。これは手段の念仏が目的の念仏に進んできたことと窺うことができる。しかし、念仏する主体が自分自身であることには変りがない。つまり一枚起請文で